

老年期における喪失と養護性の語り

— 回想法による一検討 —

三 輪 紀久子

【問題と目的】

養護性は「相手の健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能」と定義され、対象も人間、動植物に限らず幅広く、他者だけでなく、精神や技術的成長など自己に向かうものも含まれている (Fogel, A. & Melson, G. F., 1986)。例えば泣いている友達を慰めるというように幼児期からすでに見られる育み労わる心は、親過程の発達という観点から、これまで主に子どもや青年期、母親を対象に研究されてきた。Canetto, Kaminski, & Felicio (1995) によれば、セルフエスティームとの関連から老年期女性にとって養護性は重要とされる。一方、男性にとってその意義はコンピテンスに劣ると性差を指摘しているもの、これまで高齢者の養護性研究はほぼ皆無に等しい。養護性を育む要因として小嶋 (1991) は、年齢や性別以外に、子ども時代の母親との愛着関係、対人関係、役割観、そして養護経験を挙げている。また、Fogelら (1986) は、能力的に養護性の性差は無いものの、行動レベルの発現には状況因子が影響し、性差という形で現れる可能性があるとしており、本来の共感性や利他的感情からだけでなく性役割など社会的要請による影響も考慮する必要がある。

三輪 (2001) では、関係性の喪失と、それによる他者との共存意識の変化の過程をモデル化し、他者への視点の展開にあたり、養護性が一つの鍵概念となっていることを指摘した。対人的喪失感を得た高齢者が、自らの養護性に気づくことで世代継承感を持つに至った事例が見られ、調査時の養護的エピソードを含め、高齢者が他者を意識していく過程においては、養護性のもつ他者指向的感情が重要と考えられた。そこで、本研究では慈しみ育むという動機だけでなく、相手の成長や変化を“わが事のように楽しむこと”を重視し調査を進める。

本研究の目的の第一は、老年期では、どのような対象に他者指向的、自己効力的な感情が展開されるかという養護性の具体的概観である。それにより親性から、祖父母性へ繋がる養護性の生涯発達の視点が可能になると考えられる。その際、養護性のパラエティにおいて日常生活能力の相違のもつ影響に注目する。第二に、その養護的行為が語り出されてくる過程や、文脈的な意味、感情、そしてその背後にある利他的感情が高齢者にもたらす変化を取り上げる。ナラティブにおいて Bruner J. S

(1986) は、「物語の自己」という新たな自己存在のあり方を提示した。高齢者の身体機能の喪失に注目し、養護性の利他的感情が「物語の自己」の再構成に及ぼす影響について検討する。その際、語りにおける面接者と対象者の関係についても検討を加える。

【方法】

身体的な機能喪失を経験した高齢者23名（女子15名、男子8名、69～88歳）を対象に、疾病にまつわるライフヒストリー型の半構造化面接を行なった。その際、GDS15（抑うつ尺度）と老研式活動能力指標 IADL をとった。面接は、以下の視点のもと、自発的な語りを待ち、相手の言葉を利用する形で質問を挟んだ。1) 疾病前後での自己の捉えの変化 2) 疾病前後でクローズアップされてきた関係や人物 3) 疾病に伴う現在と未来への捉え 4) 他者や動植物に対する感情や、その交流 5) 関係性について—①「世話、気遣い、頼る」を巡る関係 ②世代継承感や自ら必要とされていると感じる時—

分析では、対象者が①養護性を想起する語りの文脈 ②そこに伴われた感情 ③養護性を展開する対象に注目した。さらに、そこで起きている対象者—面接者の関係のダイナミクスを言語化し、調査の進展に伴う研究者の側の変化など周辺情報を詳細に記述することで、面接者—読者間での語り状況の共体験を試みた。養護性の概念が自発性を前提としている事から、「自発的」な養護性の語りの解釈は、語り手の内的プロセスの理解上重要と思われる、6名について事例検討した。本研究の分析的視点は以下の通りである。1) 日常生活能力の差による養護性の語りの違い 2) 自発的な養護性の語りの契機 3) 関係性の問題 4) 語りという相互行為における対象者—面接者関係

【結果と考察】

23名の語りからは①趣味②作る (ex. 和裁, 洋裁, 小物作り) ③動植物の世話④料理をする⑤伝授するという5つの養護的行為が抽出され、「作る」、「料理をする」には戦後のコホートの影響がみられた。IADL 得点は3～13の幅を持ち、その高低は、語られる養護的行為の現在性・過去性の相違が主であり、低群は養護行為の大半を過去の物としていた。特に、「料理をする」については認識自体にも相違があり、高群が義務的行為とするのに対し、低群では料理への憧憬や料理を通じた伝承行

為が語られた。慢性的病いにおいて喪失は漸次的となる。さらに料理のような日常的行為の場合、決定的なライフイベントにより能力の非可逆的剥奪は宣告されず、その非可逆性は徐々に意識されて行く。それは「心理社会的移行」上、現実の対象喪失以上に決定的な意味を持つ「想定的な世界」での変化の過程といえよう (Parks, 1972)。そのような漸次性が身体機能の喪失レベルに応じ、本研究では「料理」を葛藤問題として浮かび上がったのであろう。身体機能の低下に伴う養護性の変化の過程は、育む意識の弱い養護的行為への変遷というよりも、料理のような既存の日常行為にある“育んでいた事”への気づきの過程と考えられた。そのような自身が他者に働きかけていた事への気づきは、喪失感に対し、自己効力的な喜びと、他者への繋がり意識を生み出していた。潜在的に人が他者指向的な要素を持つという捉えは、Levinas, E. (1990) の「他者の為に生きる」という自己存在のあり方を実証的に裏付けていると考えられる。

一方、自発的な語りの事例検討では、養護性の語りの前には、対人的、身体的喪失や制限が語られ、養護性の語りは、その様な閉塞感に対峙し希望や生きる明るさを見出そうとする働きをもち、時に自己存在を確認させるものとなっていた。また、IADL低群では養護性の前には“被”養護性の語りも見られた。老年期は幼児期同様、社会的に養護対象として意識されるが、そのような“労わられる-労わる”双方向の気づきは、一過的に終わらず語りを通じ繰り返し経験される。つまり、被養護的経験について意識し語ることが、同時に自分の養護性への気づきにも通じ、それにより喜びや楽しみ、時に過去や未来へつながった自己存在感を生み出す可能性を持っていると考えられた。R (69歳女性、背骨複雑骨折、IADL 7) は、「自分で自分を褒めてやらなきゃ可哀なる」と何度か繰り返し語った。そのような一面は、時に繰言のように家族に扱われ、一般的にも老人性格の一部として扱われかねない。しかしRの“自身への哀れみ”は、養護性の語りへと至り、自給自足的に被養護的体験の生産から、養護性の意識へ繋ぐ心理的な循環の一役を担っていた。

養護性の語りは、他者指向的感情をベースに、養護対象として、あるいは養護行為の共同者という形で他者への繋がり意識を生み出す。と同時に、養護性のもつ“時

代性”が過去の親や自身へ、伝承行為が未来へという形で、時間感覚と繋がり意識を拡大させ、世代性へ至る可能性をもっていた。そこには、“語り”という行為そのものの世代生成力とあいまり、時に面接者まで語り世界に取り込むような事例も見ることができた。W (70歳男性、脳梗塞後遺症、IADL3) の語りでは、「あのとき-あそこ」の“語りの世界”と「今-ここ」の“やりとりの世界”が交錯し、面接者を養護対象として捉え、三つの時間軸に渡る自己存在と世代継承性が展開されていった。松木 (1999) は間-ま-の後に終助詞を伴わない回想が続くことで、「今-ここ」と「あの時-あそこ」をクロスする共同構築作業が、語り手と聞き手の間でなされると指摘している。Wの語りでも、しばらく沈黙の後に「やりたい事がある。」「魚釣りたい。」「何遍でもそれ思う。」と終助詞のない養護性の語りが展開していた。そして特徴的なのは、「いつか-どこかで」という死後の世界も含んだ未来自己へと繋がっていった事である。この世とあの世を繋ぎ展開するプロセスの共体験は、面接者に、高齢者の未来展望の質的特有性という視点の重要性を実感させた。身体機能の制限の大きいWが見せた死後の自分は、目の前に横たわるWと、語り世界でこの世とあの世を自由に行き来するWの姿を対照的に浮かび上がらせていた。

老年期の肯定的な未来の自己像には、過去・現在・未来の連続性の自覚が関連するとされる (山口, 1996)。三つの時間がつながりそれぞれの自己が意味付けられていく過程は、語りという共同作業を通じ体験可能となった。また、発達の相互性という意味から、日々の被養護的体験を楽しむ対象として、慢性患者への医師や近隣住民など、高齢者の日常に存在する子や嫁、孫“のようなもの”がもつ、自己存在再構築上の重要性が感じられた。また、今後の課題として、語りの共同作業性の検討を、対象者と面接者の言語的関わりを通じ行なったが、その分析方法や記述方法の模索の必要がある。それにより面接者が取り込まれるダイナミクスの解明を進めることができるであろう。また、IADLの一層低い層を対象とする事で、本研究で得られた“老年期における未来”という課題について、死後の世界の自己像の語りについて考えていく事ができると考えられる。